

～知的障がい者が地域で暮らすための支援とは～
「地域で普通に過ごすこと」を「当たり前」にする支援を求めて

静岡市清水手をつなぐ育成会会長
佐野 可代子

1. 知的障害者が地域で生きていくために何が必要か

- ・ 親以外に、本人の心情に寄り添いながら支えてくれるたくさんの手。
- ・ いつでも困った時に、身近に相談できる人がいること。
- ・ 福祉サービス、制度、資源など、必要な支援が必要だけ切れ目なく提供されること。
- ・ サービスや制度の使い方が、本人、家族にわかりやすく、使い勝手が良いこと。
- ・ 「権利擁護」「相談支援」「サービス事業」が協働し、時にチェックし合いながら連動して機能するシステム。(親に代わる支援基盤の充実) ——地域自立支援協議会を生かした地域づくり。
- ・ 既存の制度やサービスから漏れてしまう場合の支援
- ・ 障害を理由とする差別や虐待を見過ごさない地域 (地域住民の理解と支え、関係づくり)
- ・ 本人が希望する生活の場の確保
- ・ 生活に必要な所得の保障
- ・ 働く場、日中活動の場の保障
- ・ 社会参加の機会や余暇支援
- ・ 成育歴、障害特性、服薬歴等々の本人情報がすぐわかるような備え等々。

2. 自立を妨げているのは、親や支援する側の人たちだったりする理由

- ・ 親の安心を優先した支援には、本人の満足度がない (少ない)。——本人主体の支援に。
- ・ 親、家族が思う「安心、安全、安定した生活」が、「本人の幸せ」だと思い込む。
(気持ちがわかるのは親だけ、と思わないほうがよい。親の意識改革が必要)
- ・ その人なりの方法で、「選ぶ」、「決める」などの経験を幼い時から積んでいないので、障害のない人たちが当たり前身に付く「生きる力」が、育たない。
- ・ 初めから「託される人」、「決められない人」というレッテルが貼られ、主体的に生きる機会を奪われる。
- ・ 親の子離れ、子の親離れができず、本人を大人扱いしていない。

3. 育成会ができることと本人たちの地域生活を支える取り組み

- ・相談支援事業所と並んで、ハードルの低い相談員活動を実施
- ・本人を支えるいろいろな手（機関）をつなぎあわせ、知的障害者が生きやすい地域づくりのための活動。（キャラバン隊の公演）
- ・本人たちの自主的な活動をサポート。（本人会の支援）
- ・社会参加の機会をつくり、経験を積み重ねる場を意識的に提供。
- ・支援者側や関係機関への情報提供。（個別支援のサポートブック作成、配布。）
- ・本人の代弁者として、障害者福祉計画、自立支援協議会、障害者福祉施策などの会議に参画し、当事者や家族の声を施策に反映。
- ・不足しているサービスや福祉資源の創出。
- ・他の機関と連携した災害時の支援ネットワークと具体的な支援対応のしくみづくり。